

# 春秋会

ニュースレター

2024.2



## 今月の予定

- ・ 2月10日17時半から  
劇団四季「バケモノの子」
- ・ 2月17日～18日  
新人歓迎旅行
- ・ 2月21日12時～13時  
第11回幹事会
- ・ 2月21日13時～14時  
選考委員会④
- ・ 2月26日18時から  
研修・ヒヤリハット研修

この冬はそれほど寒くないなと思っていたら、1月後半に入ってから寒くなってきましたね。これでも例年よりも暖かい方なのではないでしょうか。寒さにも負けず、春秋会では様々なイベントを行っています。皆様もぜひ、ご参加ください。

## 『AIと憲法～海外はAI規制にどう対応しているのか?』に関するご報告

中岡さつき（72期）

1月23日、慶應義塾大学法科大学院教授の山本龍彦先生に講師を担当いただき、『AIと憲法～海外はAI規制にどう対応しているのか?』と題して、AIが自己決定権や民主主義などの憲法的価値にどのような影響を与えるのか、EUなど海外ではどのような規制が始まっているかについてお話いただきました。

結論から言いますと、めちゃくちゃ面白かったです!!難しかったけど、すごく面白かったです。そして、憲法の重要性を改めて強く感じました。



そんなわけで、難しかった（私の知識不足で知らない単語が散見されました）ので、山本先生のお話を正確・的確にまとめるのは無理なので、私の私生活に落とし込んでご報告します。

## 2024年度広報委員

松尾洋輔（59期、委員長）

溝上絢子（57期、担当副幹事長）

西原和彦（55期）

堀川智子（57期）

浦寛幸（59期）

広瀬元太郎（60期）

柳勝久（61期）

山田寛子（65期）

金星姫（66期）

木場晶子（67期）

田村瞳（67期）

板崎遼（67期）

吉留慧（68期）

高一成（69期）

根本俊太郎（70期）

足立敦史（71期）

村本健司（71期）

河野哲平（71期）

才木晴幹（72期）

中岡さつき（72期）

中西教子（72期）

久井大輝（73期）

山本こずえ（73期）

佐々木崇人（74期）

神澤鈴子（74期）

秦尚樹（74期）

正確な内容が気になる方は、「AIと憲法」（日本経済新聞出版）をポチってください(^^) /（この「ポチっ」こそが問題の所在（アテンション・エコノミー）だったりしますが…）

### (1) ついついT i k T o kを見すぎてしまう話

先日、入浴中にT i k T o kを見ていたら3時間も経っていて、手がふやけにふやけきっていました。「なんて無駄な時間を過ごしてしまったのだろう…」と少し自己嫌悪。しかし、また別の日には4時間…。「何がそんなにT i k T o kが好きなんや。」と真面目に考えるレベル。

今回の講演で原因が明らかになりました！！

私がドラドラ人間なわけではなく、まさにT i k T o kの罠にはまっていたのです。

T i k T o kの一番の特徴であるショート動画が原因です。これこそアテンションの「強奪」、認知過程への介入です。

山本先生のお話に戻します。



インターネットの普及により情報が過多になり、アテンション（関心）や時間が情報量に対して稀少となり経済的価値を持つようになっていくということでした。つまり、「ユーザーに情報を見せてなんぼ！」という点が重視されるようになっていくようです。これにピッタリハマったのがショート動画です。人の思考過程には①直感的で処理速度の早いシステム、②論理的・内省的で処理速度の遅いシステムがあります。

先に書いたように、ユーザーにどれだけ見せるか、が重要になるので熟考させてはいけません。さっさと素早く判断させる、これがショート動画です。そして、閲覧履歴からユーザーが好みそうな動画を次から次へと流す、と思いきや。好みのものばかり流すと飽きちゃいますから、たまには関心のない動画も混ぜる。これがスロットみたいな状態となり、中毒性が出てくるとのことです。海外ではデジタルコカインと呼ばれることもあるそうです（急に怖い話になってきました）。

このように、私はダラダラしながらT i k T o kを見続けているのではなく、無意識のうちに中毒性（快楽・刺激）のある見せられ方をし、強制的（？）に動画を見せ続けられ、しかも、その動画は既に選別された私好みの動画ばかり。

私は受験生の頃から憲法が好きだったので、思想の自由市場という言葉が好きでした。「対抗言論によって自然淘汰される。だから表現の自由は重要だ。」と習いましたが、無意識のうちに自分好みの偏った情報ばかりで（フィルター・バブル、まさに囚われの聴衆）、他の情報に触れる機会が減ってしまっています。つまり、「個人がさまざまな思想に触れ、その優劣を自律的・主体的に判断できる環境」が減っていて、自己実現や民主主義が阻害される危険があります。

## (2) 某お買い物サイトの配送業者が置き配と称して勝手にガスメーターボックスに荷物を置いて帰ったこと

先日、便利で有名な某お買い物サイトの配送業者が、うちのガスメーターボックスを無断で開けて、そこに荷物を置いて帰っていました。

施錠まではしていませんが、扉のついたガスメーターボックスを無断で開けるなんてプライバシー侵害です。ガスメーターには識別番号も記載されていますし、ガスの使用量も示されています。

もちろん苦情の電話をかけました。すると、某お買い物サイトのオペレーターから「そんな情報は個人情報ではないし、そもそもなんの役にも立たない。」という趣旨の回答がなされました。「カッチーン！」センシティブ情報でないことくらい、私は正真正銘の法律家なので当然わかっています。が、私のテリトリー内の情報が無断で知られた（可能性がある）という点に不快感を抱いているのです。

ここで、山本先生のお話です。



アメリカで、消費者の購入した商品から「妊娠予測スコア」を算出して、妊娠しているかを予測し、該当者にベビー用品のクーポンを送るといった事件があったようです（ターゲット事件）。日本でも、サイトの閲覧履歴から就活生の内定辞退率を本人の同意なしに予測し、それを売却していたという事件がありました（リクナビ事件）。

このように、変哲もない情報でも自分の知らないところでAIによってプロファイリングやスコアリングされると、内定などの個人に対する決定の判断材料にされてしまい、本人としてはその決定に至った理由がわからないままになってしまうということでした。

リクナビ事件の例でいうと、「なんかわからんけど、どこいっても内定もらえない。」ということが起きてしまうということでした。

ガスメーターの識別番号も使用量もそれ単体では使えない情報ですが、他の情報と関連させることで、私に関わる決定の判断材料になる危険があるということです。例えば、ガスの使用量に水道の使用量が加わると、『ガス・水の使用量が少ない⇒自炊しないし、風呂にも入らない⇒外食ばかりしている浪費家、不潔』というような分析がなされ、「あの部屋には浪費家、かつ、不潔な奴が住んでいる」といったようなプロファイリングされてしまう恐れがあります。さらにこのデタラメ情報が不動産屋に売却されると、このデタラメ情報に基づき審査されてしまい、「部屋を汚すかもしれない中岡さつきには部屋は貸せない！」といった審査に落とされるかもしれません（完全自動化決定の危険）。このデタラメ情報が1件の不動産屋にとどまらず出回ってしまうと、私が部

屋を探す際、「なんか理由はわからんけど、どこの不動産屋に行っても部屋借りられへん(ノド)`ｼｸｼｸ…」ということが起きてしまいます。

そこで、自己情報コントロール権が重要になるのです。EUでは、個人データの取り扱いに関する本人の決定・コントロールが重視されているということでした。

山本先生のお話を聞いて、某お買い物サイトのオペレーターの「そもそもなんの役にも立たない」にイライラが再燃しています。

(3) 以上、大好きな憲法に触れることができ、また、知らないことがたくさん知れたとっても勉強になる楽しいシンポジウムでした。

この後、いつも通り、楽しく懇親を深めました。

76期の新入会員の先生方、政策委員会へのご参加をお待ちしています！



## 副会長当選祝賀会・新人歓迎会の報告

親睦委員 深谷 祐 (75期)

1月29日に開催されました、令和6年副会長当選祝賀会・新人歓迎会について報告させていただきます。

今年の会場は「ラグナヴェール大阪」。結婚披露宴にも利用されるお洒落なレストランです。また、コロナが5類に引き下げられたこともあり、昨年度を上回る80名もの先生方が参加され、終始和気あいあいとした雰囲気が進みました。



まずは、宮崎誠先生から、乾杯のご挨拶として、春秋会を様々な場面に応じてうまく活用してほしいとのお話を頂きました。

また、五月会からは来年度大阪弁護士会会長の大砂先生・同副会長の松尾先生・来年度五月会幹事長の鈴木先生に駆けつけていただきました。

そして、弁政連大阪地部長の今川先生からは、弁政連の活動をご紹介いただきました。



その後、本日のメインイベントの一つである、来年度大阪弁護士会副会長に当選された松井先生からご挨拶をいただきました。松井先生からは、「春秋会という組織の中で会員の繋がりに支えられて今の自分がある。弁護士25年目の今、自分に組織を支える番が回ってきたと思い立候補した。来年度は副会長として弁護士一人一人の目的、信念を支えていきたい。」とのお気持ちを語っていただきました。



それから、各委員会の紹介がありました。松井先生、中岡先生（政策委員会）からは、政策委員会は若手の意見が通りやすく、参加することで知見が広がるのお話がありました。今井先生、山本先生（研修委員会）からは、最前線で活躍する講師の先生方との繋がりができるとのお話をいただきました。広瀬先生（広報委員会）からは、自分たちで取材をして記事を書き、さらには委員会内での親睦も含まれるのお話がありました。西田先生、鈴木先生（親睦委員会）からは、若手が元気で活動が活発であり、毎年様々なイベントを企画しているとお話がありました。西先生（若手会）からは、破産研修などの実務を学ぶ機会があり、屋形船に乗れるなど楽しいイベントもあるとお話がありました。新入会員の方々も、是非委員会活動に積極的に参加していただければと思います！



続いて、もう一つのメインイベントである、新入会員の方々による自己紹介（前半の部）がありました。

西田先生（68期）は、現在生活保護引き下げ違憲訴訟の弁護団に入っていて、復代理人1000人を集めるため声掛けをされているとのことでした。池本先生（76期）は、事務所には個性あふれる先生が多くいらっしゃるの、それに負けないように自分の個性を培っていきたいとの意気込みを伝えてくれました。井上先生（76期）は、50歳で弁護士になられたとのこと、いろいろなご縁があって今の事務所に入られたとのことでした。今野先生（76期）は、週末にリーグワンの試合

を観戦するほどのラグビー好きです。河合先生（76期）は、厄介な事件にぶち当たりたいとの熱意をもって法テラスに所属したとのことでした。吉川先生（76期）は、26歳までプロテニス選手をされていたという異色の経歴の持ち主です。小林先生（76期）は、先輩から爪痕を残せとの指令を受け、エピソードトークで会場を笑いに包ませてくれました。大阪出身の東郷先生（76期）は、弁護士になって地元に戻ってこられてうれしいとの地元愛を語っていました。永田先生（76期）は、司法試験第3位の成績を収めたとのことと会場を沸かせてくれました。



その後、歓談を挟んで、飯島先生から、松井先生と新入会員の先生に対してお言葉を頂きました。

また、松井先生と同期の、田中先生、西村先生、上出先生から、松井先生に対して花向けの言葉が送られました。



続いて、新入会員の方々による自己紹介（後半の部）がありました。

平松先生（73期）は、元々東京で弁護士をされていたとのことですが、お父様が大阪で弁護士をされていたご縁もあり、この度地元の大阪に戻られたとのことでした。永松先生（76期）は、受験生時代にアルバイトをしていた事務所に就職されたとのことと、自分を支えてくれた事務所に恩返しをしたいとのことでした。牧田先生（76期）は、ゴルフが趣味で最近ゴルフクラブを買ったとのことと、ゴルフイベントがあれば参加したいとのことでした。松田先生（76期）は、明るいキャラクターで会場を沸かせてくれました。南先生（76期）は、15年ほど社会人として勤められた後に弁護士を志したとのことと。北陸出身の村西先生（76期）は、大阪で良いめぐり逢いがあれば嬉しいとお話をされていました。山口先生（76期）は元々お酒が飲めなかったけれども、修習の指導担当からそれを指摘され、悔しくて少しずつお酒を飲

めるように努力したという頑張り屋の先生です。山崎先生（76期）は、ドラマ、アイドル、ミュージカルなどが好きで、エンタメに強い事務所に入ったとのことでした。脇坂先生（76期）は、いろんな場所で弁護士ができることが魅力で、法テラスに所属されたとのことでした。

以上、18名の新入会員の先生方からご挨拶を頂きました。



その後、福田先生、関根先生、山口健一先生から、松井先生や新入会員の先生に向けて激励のお言葉を頂きました。福田先生からは、人との縁を大切にして、将来振り返って素晴らしい弁護士人生を送れたと思えるように頑張してほしいとのお話がありました。



そして、現副会長である高江先生から、風通しがよく若手の発言も受け入れられるという春秋会の魅力を語っていただき、それから、来年度副会長の松井先生に対して、花向けの言葉と共に、花束が贈られました。

さらに、春秋会次期幹事長の村瀬先生より、委員会は参加してみることでもいいところが分かるので、先ずはどこかに入会してみたいとお言葉があり、今年は春秋会一丸となって松井副会長を支えていきたいとの意気込みを語っていただきました。

そして、最後には、昨年と同じく、現幹事長の岩本先生から締めのお言葉を頂き、盛況のうちに閉会となりました。



今年も皆様にご協力いただき、会は非常にスムーズに進みました。また、個性あふれる新入会員の先生方を迎え、今年の春秋会はますます盛り上がっていくことが予感される会となりました。親睦委員会としても、今後新人歓迎旅行をはじめ、様々なイベントを予定しておりますので、皆様奮ってご参加いただければと思います。以上、ご報告とさせていただきます。

## 今月のボードゲーム

### 被っちゃダメよーはげたかのえじきー

板崎 遼 (67期)

今回は、ボードゲーム界の巨匠、アレックスランドルフによる名作カードゲーム「はげたかのえじき」を紹介したい。アレックスって誰やねん、という声がかしこから聞こえてくるが、ボードゲームファンとして、アレックスランドルフを知らなければもぐりである。ボードゲーム界の芦部信喜といっても過言ではない。なお、適当に名前をあげたところ、アレックスランドルフは1922年生まれ、芦部信喜は1923年生まれて巨匠感的にはほんとに近かった。



さて、どうでもいい前置きはそろそろ終わりにして本題に入ろう。

コンポーネントは極めてシンプルで、-5点から10点までの得点カードが15枚、それぞれのプレイヤーごとに色分けされた1から15までの数字が書かれた手札が15枚だけである。場に1枚ずつ順不同で出される得点カードを、手札を使って獲得していき、15ラウンド終了時の合計得点を競うシンプルなゲームだ。

得点カード



手札カード



得点カードを獲得するルールもシンプルで、場に出された得点カード1枚に対して、プレイヤー各自が手札から1枚を裏向きに場に出し、せーので表にする。最も大きい数字の手札を出したプレイヤーが、場に出された得点カードを獲得する。ただし、マイナス点の書かれた得点カードは、最も小さい数字の手札を出したプレイヤーが引き取る。なお、1度出した手札は再使用ができ

ないので、早々に13, 14, 15といった強い手札を出してしまうと後半で困ることになる。



この場合、各プレイヤーが出した手札のうち、最も大きい13を出したピンクのプレイヤーが6点を得る。

この場合、各プレイヤーが出した手札のうち、最も小さい5を出した茶色のプレイヤーが-3点となる。

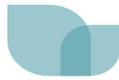


これだけであれば、なんだ10点の得点カードが出たときに15を出さだけじゃないか、となるがそうではない。ここがこのゲームのキモだが、出した数字が誰かと被ると、その数字はなかったものとして扱われてしまう。



左の状況では、15が2人、14が2人、3が1人であり、15も14もなかったものと扱われ、3を出した緑のプレイヤーが得点カードを獲得する。10なんて絶対に取れないだろうなと思って弱い3を出した緑のプレイヤーがまさかの10点獲得である。





# ひと月一島、国内航路全制覇への旅(11)

## ～長崎県・端島（通称軍艦島）～

広瀬元太郎（60期）

島めぐりを始めて1年が経過しようとしているが、ここまでの10回の内、ほとんどが九州か沖縄であると気が付いた。ここで、さらに長崎の島を書くのは気が引けるが、1月下旬、会報春号の取材のため諫早湾を訪問してしまった（春号の記事に乞うご期待）ため、また九州となってしまった。ただ、日本の島は、明らかに西日本に偏在しており、日本の島を網羅した本「シマダス」は全部で1685頁あるが、東日本は250頁しかない。

長崎の観光地として「軍艦島」は著名である。海底炭鉱掘削のために極端に高層化された島で、最盛期の人口は5300人（1960年）であったが。炭鉱の閉山により、無人島になり、高層の団地群が放置されている。廃墟マニアの聖地である。鉱山都市は廃墟と親和性が高い。採掘と共に急速に人口が増加し、閉山するや人口がゼロになる。筆者の生まれ育った愛媛県新居浜市には別子銅山という国内有数の銅鉱山があった。1973年に閉山となり、鉱山集落は無人となった。1980年代に少年時代を過ごした筆者にとって、集落跡は楽しくて仕方ない場所であった。この体験が、今の探検好きにつながっている可能性がある。



【国土地理院 地理院地図】

軍艦島は、長崎市のすぐ近くにあるような気がするが、思いのほか遠い。長崎港から、10カイリ強（20キロ）くらいはあり、快速な船でも30分はかかる。軍艦島は無人島で、観光のために上陸が許されているため、税金を使って港湾を整備するインセンティブがなく、港湾設備は脆弱である。したがって、海が少し荒れたら、船は接岸できない。今まで、多くの先人が、「上陸不可能、島の周りを回ります」といわれ辛酸を舐めている。1月は、長崎の地でも北風が強く、船会社の上陸率のグラフを見ると、台風シーズンと思われる7、8月に次いで低い。

この船が上陸しないと、1月の島めぐり記事はネタ切れ休載である。たかが会派のニュースレターなのでそれでもいいのだが、ライターとしての意地がある。長崎には、他に出島という「島」があり、江戸時代に唯一外国に門戸を開いていた有意義な場所であるが、これを島と認めたら、大阪の中之島とか大正区も島になるレベルのもので、これは避けたい。

当日、会派取材班のメンバーと長崎の坂道を放浪しているときに、軍艦島行のチケットを予約した船会社から携帯に電話が架かってきた。やばい、欠航かと思ったが、「領収証が必要か」とか「領収証のあて名はどなたにしますか」という電話であった。長崎の路地裏で、大阪の弁護士数名のフルネームを告げた。出航が前提（上陸は未定）の連絡ではあるが、こんな電話を当日の朝、乗船者の全員にしているのか？人件費をかけてそこまでする必要はあるのか？疑問ではある。



軍艦島行の船は13時に長崎港を出る。取材班のメンバーと共に、船に乗り込む。全員の名前入りの手書きの領収証が準備されていた。このくそ寒い時期に廃墟の無人島に行く人などそれほどいないと思っていたが、船は大きく、すでに、200人近くが乗船していた。この人たち全員にあて名入りの手書きの領収証を出したのだろうか。こ

の便だけのために、市販の領収書綴りを2冊くらい使っているのか。一日2便出るとして、1年で1460冊も領収書綴りを消費しているのか。それよりも、それを作る人件費は？軍艦島よりも興味がわいてきた。

座席は、暖房の聞いた船室と吹きさらしのデッキ席がある。筆者は船に乗ったらデッキ席に座るのが礼儀だと考えているので、デッキに上がる。取材班の多くは、ほんとうは船室に座りたかったであろうが、着いてくる。

出航後しばらくは、長崎港内の波の静かなところを進む。すり鉢のような長崎の街や、三菱重工の造船所が見える。ここは戦時中に戦艦武蔵を造船したところで、現在も自衛隊のイージス艦が点検中である。坂と教会の街のイメージ

がある長崎だが、軍需産業都市的な要素も多く、米軍が原爆の標的としたのもそのためと考えられる。

船内には観光アナウンスが流れ、造船所の歴史とか、近くにある島の潜伏キリシタンの歴史とかを説明してくれる。日本語の説明の後には、必ず同趣旨の英語の案内がある。録音音声ではなく、誰かが直接英語をしゃべっている。領収証の件も含め、結構サービスに力が入った船会社である。

出航後10分くらいで、船は湾外に出て揺れ始めた。船内の歩行は柱を持たないと困難である。「上陸できるとは限らないですよ」というアナウンスが流れ始める（英語あり）。上陸できない場合は、島を回るだけとなり、一部返金するとのことである。良心的である。上陸条件は、①波高0.7m以下、②風速5m以下、③視程500m以上とのことである。さらっと書いているが、結構ハードルは高い。この日は雲が多いが晴れだったので③はクリアするが、①②は怪しい。波高の定義がわからないので間違いかも知れないが、波高が70センチくらいとは思えない。

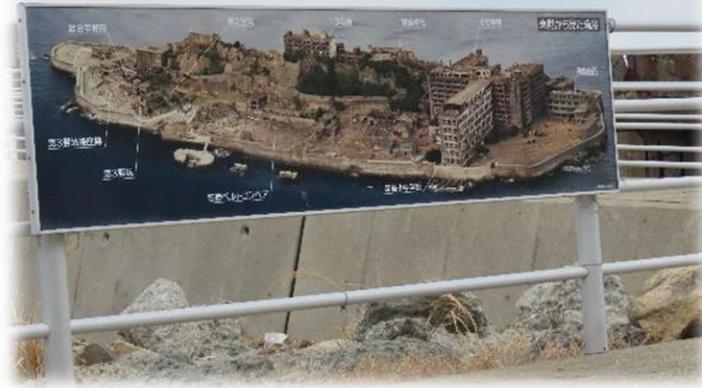


写真で見る軍艦島の廃墟団地群が見えてきて、軍艦島にぐんぐん近づいていく。波は高いが、上陸できそうだ。船の着く栈橋はドルフィン栈橋という。観光用に命名したように思えたが、この島が現役だったころからこの名前らしい。潮の干満、波に合わせてタラップ

が上下する構造で、この構造の栈橋としては日本初だったとのことである。

軍艦島内は、自由に動けるわけではない。一見しただけでも、団地群の荒廃は激しく、ここを単独行動されたら、死人続出で直ちに上陸禁止になりそうである。観光用に整備された柵付きの歩道の内部から、少し離れた廃墟群を見るというものである。ただ、柵は隙間が多く、係員の目を盗んで脱走し、廃墟群に行けそうな気はする。おそらく、それをやった先人はいると思われ、乗下船時に厳格な人数管理をしている。さらに、勢いで変なことをする者をいれないためか、飲酒をした者の上陸も禁止されている。脱走しても、乗船人数が一致しなければ、その時点で搜索される可能性が高い。さらに、脱走に成功したとして、電気もガスも水道もない廃墟等で、明日の船を待つのも寒く怖いだけだし、それを武勇伝としてYou Tubeにアップしたら懲戒確実なので、何の意味もない。

最盛期の人口が5300人、その時の人口密度が83,600人/km<sup>2</sup>（東京23区の9倍）の街が無くなったのは1974年4月20日である。まさに、今年で50年。ガラスはほとんど割れ、内装はガタガタであるが、コンクリート構造物は、50年人が入らなくても、この程度の外観は保つことができるのかとも考える。



上陸時間は30分程度で、海上からの島の周回に移る。島の上陸許可場所は、南端部の一部分であるのに対し、廃墟群は北半分にあるため、北半分の廃墟群に迫るのは、海上からの方が適していると思われる。親切にも、右舷、左舷両側

の乗客に配慮して、廃墟群の近くで船は向きを変えて往復してくれる。船が桟橋の反対側である島の西側に出ると、今までになく船が揺れ始める。下手に歩くと、落水しそうである。この寒さで落水すると、1分以内に死ぬから注意しないといけない。

海から見る廃墟群は圧巻である。まさに、軍艦の窓が並んでいるようである。望遠レンズで、一室をアップして撮影しようとするが、船が揺れまくるので照準が合わない。写真を撮ると、怖いものに移るかもしれない。

今は荒れ果てていて心霊スポットのようであるが、昭和中期、この島は最先端だった。炭鉱を運営しているのは三菱鉱業（現「三菱マテリアル」）という超優良企業であり、石炭採掘はきついが、給料は公務員の3倍とのことであっ



た。おそらく、組合も強かっただろうし、ブラック企業ではない。また、テレビ、冷蔵庫、洗濯機の普及率は100%、島の中にパチンコ屋や映画館もあり島内で生活は完結していた。も

ちろん、全員が幸福ということはないが、当時としては生活水準の高い島であった。船で上映されたビデオでは、繁栄をしていたころの笑顔の写真と今の廃墟の写真が定点撮影で重ねられる。おそらく、思い出補正が入っていると思われるが、いい島であったと思われる。島を閉じる理由も、戦争や疫病や倒産ではなく、石炭の枯渇が原因で、炭鉱都市としては天寿を全うしたのだ。家庭ごとの個別の事情は別として、総論としては心霊が出るような場所ではない。

天寿を全うした炭鉱都市が、どのように自然に帰ってくか、自分の天寿の方が絶対先であるが、興味はある。



しかし、めちゃくちゃ船は揺れている。そのうち、波が船内にかかり始めた。筆者も、この寒い中、かなりのしぶきを食ってしまった。カメラが壊れてしまう、大丈夫か。ふと壁をみると、船の建造年月が書かれたプレートがある。平成元年建造

だそうで、まあまあ年季が入っている。寒いので、船室に入る。船室は、波のかかるデッキから逃げてきた人で、座席はもうなかった。初老のおじさんがマイクを握り、英語でアナウンスをしている。英語のアナウンスはこのおじさんだったのか。さすが、江戸時代を通じて海外に門戸を開け続け、潜伏キリシタンをかくまっていた長崎は人材が豊富である。原稿を読んでいるだけではなく、外国人の個別の質問にも対処しており、たいしたものである。急に、このおじさんの給料が気になってきた。同時にこの会社の収益も気になってきた。軍艦島の往復料金が4000円なので、200人乗っているとして、一航海の売上が80万、一日2航海で160万。操舵室に3人くらいいたような気がする。この案内のおじさんが3人くらい。船の価格が全く分からないが5億円くらいか？、35年で割って1日4万円、なんかめちゃめちゃ儲かっているような気がする。



長崎港に戻り、寒すぎたので、取材班は出島近くの店でお茶をした。筆者が、船会社の収益について問題提起すると、みんなが、繫留料は結構高いとか、地上

職員の人件費を考慮していない等、貴重な意見をくれた。たしかに、大量の手書きの領収証を発行している人がいるのだ。このような、くだらない話でもちゃんと付き合ってくれるので、同業の仲間は貴重である。



2回目の執行部だよりの順番が回ってきました。会計担当ですので、今回は、会計担当の仕事について、お話ししたいと思います。

会計の仕事は、大きくは会費収入の管理と、総会や各委員会の行事費等の支払いになります。会費収入につきましては、昨年5月に会員の皆様に会費納入のお願いをさせていただき、多くの方に納入して頂いております。会計の仕事としては、会費の納入をチェックするのですが、約660名の会員がいらっしゃいますし、会費減免対象の方もたくさんいらっしゃいますので、チェックするのも大変で、地味な作業です。

一方で、支払い関係は、総会にかかる費用や各委員会の行事にかかる費用の立替えがありますので、その清算を行います。立て替えをして頂いた方から清算の請求書とその資料が届けば、それらをチェックして、振り込みます。各委員会の行事も多く、囑託への支払いも毎月ありますので、支払い回数も多いです。昨年度に委員会活動活性化費（委員会懇親会への補助）という予算が新設されましたので、その清算もあります。支払った金額や内容についても、予算執行状況がわかるように帳簿につけていきます。これらも地味な作業です。

その他、年度当初には、予算案を作成して幹事会で承認を得たり、総会で予算執行状況の報告をしたりしています。

このように書いてみれば、会計として当たり前のことばかりなのですが、会計の仕事は、会員の皆さんや各委員会を担って頂いている委員の皆さんの協力がなければ、仕事できません。本年度も皆様のご協力があって、これまで会計の仕事を進めることができたと思います。本年度も残りわずかですが、最後まで、どうぞよろしくお願いいたします。



## ニュースレターの原稿を募集します！

---

広報委員会としましては、このニュースレターを双方向的なものにしたいと思っており、会員の皆様の原稿を大募集いたします。

是非、ご投稿いただきますようお願い申し上げます。

- 1 今までのニュースレター・会報の記事に対するご意見
- 2 子育て体験談
- 3 変わった国に行った旅行記
- 4 ペットや趣味の紹介
- 5 感動した本、マンガ、ゲームの紹介

下記にお送りいただければ、ニュースレターに掲載させていただきます。（もちろん、一定の審査はさせていただきます）

広報委員会委員長 松尾洋輔 [y-matsuo@dojima.gr.jp](mailto:y-matsuo@dojima.gr.jp)